

住まう道 寄り添う町

「道」とは、町の変わらない場所である。「道に住まう」とは、そこに愛着を持つことである。
 本提案では、「道に住まう」ことによって、町が継承され、世代を越えた彩りが生活に生まれる
 富山型コンパクトシティにおける徒歩居住圏のあり方を提案する。



道から生まれた交通と学びの町

■南富山駅周辺のポテンシャルと課題点

南富山駅は富山市中心市街地から路面電車で南に20分の場所に位置する鉄道と路面電車の乗換え駅である。この駅を中心とした対象地は住宅が大半を占め、富山型コンパクトシティの基盤となる居住特化地域と言える。またこの地域には、小中学校と二つの高校が存在し、子供は18歳までこの地域で学び、成長するための施設が充実している。しかしそれらをつなぐ町・道には様々な課題が存在する。

課題点

- 駅舎の老朽化
- さみしい待合室
- 駅前の抜け道利用
- 駅から離れたバス停
- 駐輪場不足
- 商店街の衰退
- 広い道による町の分断
- 歩車分離が明確でない
- 通学時の安全性
- 地下道が暗く利用しにくい
- 自転車道の未整備

南富山駅周辺は江戸時代には農村であり、中心市街地としての発展はしていない。しかし明治に行われた2回の共進会と路面電車の開通をきっかけに発展してきた、地域に根差した居住と学びに特化した地域である。

■住宅中心の町の多様な道

交通・歴史・主な利用者の3点から道を分類すると、住宅地でありながら様々なタイプの道が混在し、それぞれの持つ良さや特徴を打ち消しあっている場所も見受けられた。

交通面の特徴	路面電車と自動車の通る広い道	＝
自動車のみ通る道	＝	
歴史的特徴	飛騨街道から歴史を汲む道	＝
主な利用者	小学生(通学時の徒歩)	＝
中高生(通学時の徒歩/自転車)	＝	
近隣住民(買い物などで徒歩/自転車)	＝	

■学びの町

公立の学校が多くある一方で、住宅地の中には住宅の一部を利用した習い事・〇〇教室が多く見られる。富山の人々の学ぶことへの関心の高さが、農民が教えることが多かった越中の寺子屋から受け継がれていると考えられる。学校で、習い事で学ぶということが、この町と住民を結びつけている。

住まう道から町のつながりをつくる

■住まう道のデザイン

道は町の要素の中で更新頻度が低く、町に長く残る。周りに建つ建物が更新されていっても町の面影や雰囲気は継承する為に、道にそれぞれキャラクターを与える。道の主な利用者から3種の道を設定する。さらに3種の道に今ある町の様子とこれからの町の姿を考慮し細かく道のキャラクターを作っていく。

利用者	目的	住まう道
お年寄り(家族連れ)	ランニングや散歩を楽しむ自然に触れる道	緑の電車道 川の散歩道
中高生(買い物客/家族連れ)	下校時に友達と話ながらのんびり歩く道	四季の道 学びの道
小学生(お年寄り/買い物客)	日常生活で相互の助け合いの生まれる道	育みの道 賑わいの道

■町を束ねる軸線

駅の南北を結ぶ道を歩行者の軸とし、並行して走る路面電車の通る道を交通の軸とする。軸の南端に駐車場/市場を設け、通過交通を抑制する歩車間のインターフェイスとする。学校地域をつなぐ道を隔てられた町の東西をつなぐ架け橋に設定する。歩行者の軸は網状に広がる住まう道と絡み合い、駅を中心に町に回遊性を与え、町を結びつける。

■住まう道から生まれる寄り添う町

住まう道のデザインによって道ごとの主な利用者や関連要素を住民に認識させる。住まう道沿いの使い方、新しい建物の用途、イベントの企画などが認識に基づき一貫性のあるまちづくりとして展開されていく。住民主体で寄り添う町が形作られ、内から活気生まれる居住特化地域として、多くの人に長く住まれる場所となる。

■町をつなぐ展望台

二つの学校をつなぐ道を幹線道路を渡るデッキ化し、道路上の空間を町を俯瞰して眺める場とする。立山連峰を背景に、ここから見える風景は自分の町という想いを胸に抱く場所となる。東西に緩やかに伸びるスロープと階段で上り、歩行者の為の道の交点としてみんなが利用しやすい形態とする。

■道＝町＝駅

路面電車の駅は改札を必要とせず、超低床車により乗場を高低差のないプラットフォームで、町・道と地続きの駅とすることができる。駅の形式はそのままだに、周辺の商店街や広場とより結びつきの強い駅を計画し、電車を待つ人と買い物をしたり本を読む人と入り交ざる場所とする。

■大通りに面する市場

旧飛騨街道に面した位置にパークアンドライド用駐車場を計画する。交易の道、プリ街道と呼ばれるこの街道沿いに地元の食品などを売買できる日曜市を行い、地元物に触れる機会を作る。同時に交通量の多い幹線道路沿いに駅へのアクセスの為の駐車場を計画し、自動車流入を抑制し安心して歩くことのできる道とする。

■住まう道の整備

市政20周年である2025年に向け住まう道とソフトから整備を進める。歩行者の軸沿いに多くの学習・保育機能を集積し、子供や近隣同士の関係を「育みの道」とする。他の住まう道にもそれぞれ機能集積を誘導し、「学びの道」「四季の道」とする。

事業開始	2016	2020	2025	2030
ハード	道路整備	歩車道の整備 バスルート変更 コミュニティバス導入	展望台建設	町内会や学校と連携し緑の整備
住まう道	緑化整備 南富山駅	道路・広場ごとに植栽 新駅舎建設	駅前広場整備 駅前通りをパラサまで延長	
日曜プラザ			駐車場・市場整備	日曜・祝日は市場を開催
学生向け施設			駅前図書館建設	
ソフト	高齢者向け教室	高齢者向け教室を支援 教室受講した高齢者を継続的に支援し教室数増加		継続・更新
寄り添う町	子供向け教室	個人宅での教室運営を支援 学習保育の強化		継続・更新
子供の成長		誕生	保育園入園	小学校入学
			緑の通学路・集合場所 放課後近所のお年寄りの家で習い事	部活帰りに 駄駄街で遊ぶ
				中学校入学
				高校入学
				駅前図書館で習字

■寄り添う町の継承

2025年までに整備した住まう道によって、住民に完成形を押し付けるのではなく、より良い姿を自らが考えて発展させられるよう誘導する。住まう道に新たな機能が展開することで、住まう人に愛される町として継承されていく。この町に生まれた子供たちは、小中高校生と学び、成長していき、やがて次の世代へと住まう道寄り添う町を受け継いでいく。

■木とともに育つ

子供が生まれるときに記念樹を植樹し、子共とともに成長を見守る。